成方の笛

名前（　　）　日づけ（　／　）　できた数（　／28）

使い方　本文を声に出して読んでから、傍線の番号を手がかりに解きます。**この話の山は①⑨⑩の敬語の種類と方向、⑪「こそ～見れ」の係り結びと⑫「こそ～けれ」の逆接、そして⑬「あらぬ笛」で明かされるどんでん返し**です。

あらすじ＝笛の名人成方は、藤原道長からいただいた名笛「大丸」を持っていた。それをほしがった俊綱は、売るのを断られると、使いに「成方が売ると言った」とうそを言わせ、言い値で買おうと迫る。成方が否定すると、俊綱は人をだました罪だとして、成方を拷問にかけようとする。成方は暇をもらって笛を取ってくると、「この笛のせいでこんな目にあう」と、人々の前で笛を石でこなごなに砕いてみせた。俊綱はしかたなく成方を放したが、砕かれたのは別の笛で、本物の大丸は無事だった。強引な俊綱は、結局愚か者として笑われることになった。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

成方（なりかた）といふ笛吹きありけり。御堂入道殿（みだうにふだうどの）より大丸（おほまる）といふ笛を①賜（たま）はりて吹きけり。②めでたきものなれば、伏見（ふしみ）修理大夫（すりのだいぶ）俊綱朝臣（としつなのあそん）、欲しがりて、「千石（せんごく）に買はむ。」とありけるを、売らざりければ、③たばかりて、使ひをやりて、「④売るべきのよし言ひけり。」とそらごとを言ひつけて、成方を召して、「⑤笛得させむと言ひける、本意（ほい）なり。」と喜びて、「価（あたひ）は乞ふによるべし。」とて、「⑥ただ買ひに買はむ。」と言ひければ、⑦成方色を失ひて、「さること申さず。」と言ふ。

この使ひを召し迎へて、⑧尋ねらるるに、「⑨まさしく申し候（さぶら）ふ。」と言ふほどに、俊綱大きに怒りて、「人を欺（あざむ）きすかすは、その咎（とが）軽からぬ事なり。」とて、雑色所（ざふしきどころ）へ下して、木馬（もくば）に乗せむとする間、成方いはく、「⑩身の暇（いとま）を給（たま）はりて、この笛を持ちて参るべし。」と言ひければ、人を付けて遣（つか）はす。

帰り来て、腰より笛を抜き出でて言ふやう、「⑪このゆゑにこそ、かかる目は見れ。情けなき笛なり。」とて、軒のもとに下りて、石を取りて、灰のごとくに打ち砕きつ。大夫、笛を取らむと思ふ⑫心の深さにこそ、さまざまかまへけれ、今は言ふかひなければ、戒（いまし）むるに及ばずして、追ひ放ちにけり。

のちに聞けば、⑬あらぬ笛を大丸とて打ち砕きて、もとの大丸は、ささいなく吹きゆきければ、⑭大夫のをこにてやみにけり。⑮始めはゆゆしくはやりごちたりけれど、つひに出だし抜かれにけり。

語注　成方＝笛の名人。御堂入道殿＝藤原道長。「御堂」は道長が建てた法成寺のこと、「入道」は出家した人。大丸＝笛の名。賜はる＝いただく。めでたし＝すばらしい。伏見修理大夫俊綱朝臣＝修理大夫（宮中の建物の修理をつかさどる役所の長官）であった俊綱。「朝臣」は名の下につける敬称。あとに出る「大夫（だいぶ）」も俊綱のこと。千石＝米千石。たいへんな値段。たばかる＝計略をめぐらす。たくらむ。そらごと＝うそ。本意＝かねてからの望み。価＝値段。乞ふ＝求める。色を失ふ＝顔が青ざめる。すかす＝だます。咎＝罪。雑色所＝雑色（雑用をつとめる下役）の詰め所。木馬＝木で作った馬の形の、拷問の道具。暇＝休み。ひまをもらう許し。かかる目＝このようなひどい目。情けなし＝思いやりがない。薄情だ。かまふ＝計画する。たくらむ。言ふかひなし＝言ってもしかたがない。どうしようもない。戒む＝罰する。こらしめる。あらぬ＝別の。ほかの。ささいなく＝何事もなく。無事に。をこ＝愚かなこと。ゆゆし＝程度がはなはだしい。はやりごつ＝勢いこむ。気負い立つ。出だし抜く＝人のすきをついてだます。

成方の笛

A　語句の意味と読み（1〜7）

（1）①「賜（たま）はりて」の「賜はる」の意味を書け。

（2）③「たばかりて」の「たばかる」の意味を書け。

（3）⑤「笛得させむと言ひける、本意（ほい）なり」の「本意」の意味を書け。

（4）⑦「成方色を失ひて」の「色を失ふ」の意味を書け。

（5）⑬「あらぬ笛」の「あらぬ」の意味を書け。

（6）⑭「大夫のをこにてやみにけり」の「をこ」の意味を書け。

（7）⑮「始めはゆゆしくはやりごちたりけれど」の「はやりごつ」の意味を書け。

B　文法（8〜13）

（8）②「めでたきものなれば」の「なれ」の文法的意味と活用形を答え、「なれば」の訳し方も書け。

（9）⑤「笛得させむと言ひける」の「させ」と「む」の文法的意味をそれぞれ書け。

（10）⑧「尋ねらるるに」の「らるる」の文法的意味と活用形を書け。

（11）⑨「まさしく申し候（さぶら）ふ」の「申し」と「候ふ」の敬語の種類をそれぞれ書け。

（12）⑪「このゆゑにこそ、かかる目は見れ」の「見れ」の活用の種類と活用形を答え、その活用形になる理由も書け。

（13）⑫「心の深さにこそ、さまざまかまへけれ」では、係り結び「こそ〜けれ」で文が終わらず、「、今は言ふかひなければ」と下に続いている。このとき「こそ〜已然形、」は下にどのような意味でつながるか。

C　主語・指す内容・敬意の方向（14〜17）

(14) ①「賜（たま）はりて」の「賜はる」は、誰から誰への敬意を表しているか。

(15) ④「売るべきのよし言ひけり」は、誰が誰に言わせたうそか。また、このうそでは、誰が「売ろう」と言ったことにされているか。

(16) ⑨「まさしく申し候（さぶら）ふ」は誰の言葉か。また、「候ふ」は誰から誰への敬意を表しているか。

(17) ⑩「身の暇（いとま）を給（たま）はりて」の「給はる」は、誰から誰への敬意を表しているか。

D　口語訳（18〜21）

(18) ⑥「ただ買ひに買はむ」を口語訳せよ。

(19) ⑩をふくむ「身の暇（いとま）を給（たま）はりて、この笛を持ちて参るべし」を口語訳せよ。

(20) ⑪をふくむ「このゆゑにこそ、かかる目は見れ。情けなき笛なり」を口語訳せよ。

(21) ⑮「始めはゆゆしくはやりごちたりけれど、つひに出だし抜かれにけり」を口語訳せよ。

E　内容・記述（22〜25）

（22）⑦「成方色を失ひて」とあるが、成方が顔色を失ったのはなぜか。成方の置かれた立場にふれて説明せよ。

（23）⑪「このゆゑにこそ、かかる目は見れ」と言って笛を打ち砕いた成方のねらいは何か。⑬の内容にふれて説明せよ。

（24）⑫「心の深さにこそ、さまざまかまへけれ」とあるが、俊綱が最後に成方を罰しなかったのはなぜか。本文の言葉にふれて説明せよ。

（25）⑭「大夫のをこにてやみにけり」とあるが、俊綱が「をこ」の者として終わったのはなぜか。話の結末をふまえて説明せよ。

F　文学史（本文全体をふまえて答える）（26〜28）

（26）この文章の出典『十訓抄』は、どの時代に成立した、どのようなジャンルの作品か。

（27）『十訓抄』という書名の「十訓」とは何か。この本の組み立てにふれて説明せよ。

（28）『十訓抄』と同じく鎌倉時代に成立した説話集を一つ書け。

【テスト直前チェック】この三つ　❶敬語は「種類」と「方向」をセットで。①「賜はる」＝謙譲（作者→道長）、⑩「給はる」＝謙譲（成方→俊綱）、⑨「候ふ」＝丁寧（使い→俊綱）。地の文は作者から、会話文は話し手から。 **❷「こそ」は已然形で結ぶ。**⑪「見れ」は上一段「見る」の已然形（命令形ではない）。⑫「こそ〜かまへけれ、」のように文が続くと逆接「〜けれども」になる。 **❸砕いたのは「あらぬ笛」。**⑬＝本物ではない別の笛。本物の大丸は無事で、強引な俊綱が⑭「をこ」として終わる、という結末を一文で説明できるようにしておく。

▸ 古文・漢文の参考書のおすすめ（楽天・Amazonのリンクつき）　kotennosennsei.com/koten-kyozai-review/　　▸ 解説記事にもどる